

---

# 錦繡事変 (きんしゅうじへん)

猫目石

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

きんしゅうじへん  
錦繡事変

### 【コード】

N9880X

### 【作者名】

猫目石

### 【あらすじ】

りんが大雨の中、行方知れずになって三年。

西国では大掛かりな紅葉狩りが催されることになった。国主の殺生丸以下、主だった重臣がすべて揃う秋の宴。さて、何が起きるか？

11部の連載です。

?

朱色、鴉色、蜜柑色、深緋、雌黄、木賊色、芝翫茶、松葉、縹色、山吹、海松茶、鶉色、臙脂、この紅葉の見事さをどう表現すればいいのだろうか。

『筆舌に尽しがたい』とは、当にこの事を言うのだろう。

次から次へと色の名を挙げてみるが、きりが無い。

ああ、もう、よそつ。

ともかく、赤から黄、茶色から緑と、あらゆる色彩が見事な諧調を保って全山を覆い尽しているのだ。

当に錦秋の名に恥じぬ場景が広がっている。

ここは西国でも紅葉の名所として名高い錦繡山脈の中に位置する小さな盆地。

周囲をグルリと紅葉に彩られた山々に囲まれたすり鉢状の大地である。

敷地に換算すれば三千坪ほどになるだろうか。

盆地のそこかしこに自生する優に千年の樹齢を数えるに違いない銀杏や楓の大木。

その周囲に沿って、これまた様々な色の毛氈が敷き詰められている。

赤、青、緑、黄、紫、茶、白、黒と頭上の紅葉と競うように鮮やかな色彩が乱舞している。

それは、まるで島のように各家の陣地を主張している。

当然、目ぼしい大木は有力な家々が独占している。

中でも、一際、見事な大紅葉の大樹の根元には血のように赤い猩々緋の毛氈が敷き詰められていた。

先代の西国王、殺生丸の父、鬪牙王の母方の従兄弟に当たる豺牙一門の物である。緋毛氈の上座に当たる位置には、漆黒の絹地に金糸、銀糸の刺繍で飾られた対の座布団と脇息が置かれ主賓の着座を今や遅しと待ち構えている。

「宴の準備は万端、怠りないであろうな」

「ハッ、豺牙様に命じられた通りに全て整っております」

小山のような体躯に縮れた赤毛の男、豺牙は家臣の言葉にニヤリと笑った。

太い眉、丸い大きな目、突き出た鷲鼻、大きな分厚い唇、気の弱い者なら怯えて泣き出しそうな魁偉な容貌である。

「お父さま、殺生丸さまは本当にお越しになるのでございましょうね」

赤い髪の美女が豺牙に問いかける。

豺牙ご自慢の愛娘、由羅である。

幼い頃に亡くなった美人の母親似なのだろう。

由羅は髪の色こそ父親と同じ赤毛だが中々の美姫である。

純白の白絹に秋の草花を散りばめた豪華な打ち掛けを身に纏う由羅は見ようによつては花嫁のように見える。

豺牙が普段の銅鑼声からは及びもつかない潜めた声で由羅に注意を

促す。

「間違いない。よいか、由羅。そなたの魅力で、必ずや、あ奴を骨なしにするのだぞ」

「うふふっ、お任せ下さい、お父さま。必ずや殺生丸さまを私の虜とりこにしてみせますわ」

己の容貌に相当な自信があるのだろう。

由羅は紅い唇をほころばせ高慢な言葉を返す。

外見こそ余り似ていないものの、そこはやはり親子、由羅の内面も父親の豺牙と大して変わりがない。

つまり、どこまでも権力と財力を追い求める欲望の権化なのである。

遠い空にポツリと小さな点が映うつった。

それは良く見ると一列に連なった行列でユツクリと盆地に近付いてくる。

列の先頭を走るのは希少な双頭の竜、阿吽に跨またがった西国王、殺生丸。右肩に流れる華麗な白銀の毛皮には従者の小妖怪、邪見がしがみ付いている。

その後、重臣の尾洲と万丈、側近の木賊とくまと藍生あゐせい、殺生丸の乳母であった女官長の相模、以下、続々と家臣が続いている。

「おいでになったようだ。皆の者、そそうのないようお持て成しいたせ」

「ハッ！」「」「」「」「」「」

野太い声の主の命令に家臣一同が声を合わせて答える。

同時に豺牙は腹心の部下に目をやり声なき合図を交わしていた。

（手筈は良いな？）

（仰せのままに）

これまで豺牙は殺生丸と由羅を結びつけるべく様々な策を巡らしてきた。

当代の西国王、殺生丸には先祖の呪のせいもあつて親類縁者が非常に少ない。

だからこそ、殺生丸の父の従兄弟という本来ならば遠縁でしかない豺牙が、当主が不在の間、縁戚として権勢を揮うことが出来た。

だが、本来の主、殺生丸が帰還した今、以前のように西国王の縁戚として好き勝手に税を徴収したり領地を強奪する真似は出来なくなつた。

それどころか、旧悪を暴かれる怖れさえある。

このまま手を拱いていては縁戚としての立場さえ危うい。

そう考えた豺牙は、より強力な立場を手に入れるべく、即、行動を開始した。

西国王の舅という外戚として、これ以上ない強力な立場を手に入れる為に、豺牙はあらゆる機会を通して自分の娘の由羅を売り込んだ。殺生丸と由羅が婚姻を結んだ後は男子を産んでくれれば万々歳。

そうなれば男孫を後継者として擁立し、その後見としてジワジワと

立場を強め西国の実権を握る。

だが、そうした豺牙の計画を阻害する存在が浮き彫りになった。

三年間、殺生丸が欠かさず三日おきに通う人里に住まう人間の小娘。邪魔な芽は摘まねばならない。

周到なる準備の下、豺牙は部下に命じて人間の小娘を始末させた。

まず大水を降らせる為に雨師と風伯に頼み込み大水を降らせた。

その上で毒蛾の蛾々が幻惑の術で増水した川の近くに小娘を誘き寄せ川に落とし込んだのだ。

状況から見て誰もが溺死したと思っただろう。

もう今から三年も前のことだ。

豺牙は、この宴が事実上の婚礼と周囲の者に認識されるよう画策してきた。

真紅の毛氈、対の座布団、脇息、御膳立ては全て調った。

後は主役の殺生丸と由羅が揃いさえすれば良い。

殺生丸に響する酒には予め強力な媚薬を仕込ませてある。

国主の殺生丸を始めとして犬妖族は尋常ならざる嗅覚を有している。人間なら、到底、気付くはずもない微かな異臭でさえ彼らは感知する。

それをごまかす為に屠蘇散を大量に入れ『薬酒』と銘打って用意させた。

更に酒肴には精力を増強させる山海の珍味佳肴を取り揃えてある。

要は主賓の場に殺生丸が就いてくれさえすれば、ほぼ豺牙の企ては成就するのだ。

後は済し崩しに婚姻を成立させてしまえば良い。

己が目論みの成功を確信した豺牙は込みあげてくる笑いを押し殺すのに苦勞していた。

『錦繡事変？』きんしゅうじへんに続く

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9880x/>

---

錦繡事変（きんしゅうじへん）

2011年10月28日10時04分発行